

正倉院年報

一、古裂の整理

昭和三十四年度においては昨年度より引続いて第八十七号慶長櫃に納める布、綿及木綿断爛中の衣服裏袋類の整理を行つた。その結果は左のとおりである。

一、白布袍残闕 第五十一号

上領、左前身部、左袖墨書「駿河国富士郡久式郷戸主□□□□調布
老端」、衽裏亦墨書「銅工」

右袍は駿河国の調布をもつて作る。駿河国調布銘は初見のものである。

一、白布袍残闕 第五十二号

上領、左前身部残闕

一、褐色細布袍残闕 第五十三号

上領、左前身部、袖一隻、後身裾部

一、褐色細布袍残闕 第五十四号

右前身および左前身裾部、袖残闕一隻

一、褐色細布袍残闕 第五十五号 六片 附襟残片

前身上部、左前身裾部、右前身下部、袖一隻、背部残片

右細布の袍類は橡染であらうか黒褐色を呈し腐蝕が甚しい。

一、白布衫残闕 第十六号

緑絶襟、右上半身部、衽裏墨書「□後一鉦盤天平勝寶四□」
呉染鉦盤の衫である。

一、白布衫残闕 第十七号

半身部、残破甚しく右半身部か左半身部か明らかに難い。

一、白布衫残闕 第十八号 三片

上領、左前身、袖、背裾部

一、白布衫残闕 第十九号 一領

貫頭布衫、裾部闕損、胸部中央に墨書「後醉胡六年」

呉染醉胡の布衫

一、白布衫残闕 第二十号 一領

貫頭布衫、裾部闕損、左袖口背墨書「東寺度羅樂久太衫 天平勝寶
四年四月九日」

一、白布裏残闕 一条

一幅半、一端墨書「法」

一、両口布袋 第九号 一口

白布、長七二匁、幅四五匁、墨書「甲、東大寺、後二」

一、同 第十号 一口

白布、長七一匁、幅四六・五匁、墨書「山上□、甲卅三百本」

一、同 第十一号 一口

白布、長六七・五匁、幅四七匁、墨書「東大寺」

一、同 第十二号 一口

白布、半匁、幅四五匁、墨書「神、□山、乙、」

右両口布袋は南倉に両口面袋と呼んで二十八口保存されているものと同じものである。しかしこれ等の袋は面袋ではなく、伎楽用の衣裳類を納めた袋であつて、両端に口を開け、紐通しを作り、口を閉じるようにしてある。

一、治道面袋残闕

白布表、白絶裏、闕損が多い。口幅四八匁、墨書「治道□□」

一、金剛面袋 一口

白布、単、口幅六四匁、深七〇匁、墨書「金剛面、基永師、前二、

天平勝寶四年四月九日」

一、前 裳第七号 一腰

白布、二幅、長八二匁、裾端墨書「継」

一、前 裳第八号 一腰

白布、一幅半、長八二匁

前裳は駮使丁、直丁、雇女等に給せられる衣料で、前垂のように著用し衣服の汚染損傷などを防ぐために用いられた。

二、宝物の修理

本年度において宝物の修理を終えたものは左の諸品である。

一、古 櫃 第三十八号 一合

一、同 第三百三十号 一合

一、同 第三百六十一号 一合

一、同 第三百六十六号 一合

いずれも杉材、第三十六号は赤漆塗、他は白木造、各稜角には黄漆を塗る。両長側に各二本の脚を着けた所謂四脚唐櫃で、奈良時代の作である。

一、漆 鼓 胴 二十二口

樺材を轆轤挽して鼓面に当る部分を撥形に張り中心をくり抜き、腰に三条の帯を造り出してある。内外を黒漆で塗り、内一口には彩絵を施すが、殆んど磨滅してその図様は明らかでない。胴外側に「東大寺」の刻銘がある。

三、宝物の特別調査

(1) 硝子調査

本調査は宝庫にある七・八世紀の代表的硝子器をはじめ数万個に及ぶ種々の硝子玉、その他器物を荘る硝子莊玉等について、その伝来製作手法

等を究明するため本年度より開始された。本年調査された硝子器中特に白瑠璃瓶は、その形式が中国唐代また我が奈良時代には胡瓶と称せられササン・ペルシヤ朝式の瓶であることは勿論であるが、近年本器に酷似するガラス器がこの種器形の本源地ともいふべきイラン、イラク方面から出土していて、本器もその製作が優秀な点から推して、ペルシヤ方面で製作され、中国を経て我が国に渡来したものであらうと考えられること、また緑瑠璃十二曲長坏は、近年中国から出土する金銀或は金銅製の長坏と全くその形状を一にしているが、この種器形はひとり中国に限らず南ロシアやポーランドなどから発見されていて、その器形に一種の特異性が認められ、図紋もまた彼独特の意匠からなっている。この長坏はその図様に多少西方の要素が反映するものがあるにせよ、これを中国製と見るべきであると推定されたこと等、興味ある結論を得られた。調査員は日本学士院会員文学博士原田淑人、日展参事各務鉦三、名古屋大学教授理学博士山崎一雄、東京国立博物館美術課長岡田譲の四氏である。調査を了したものは左の諸品である。

- 一、紺瑠璃坏
- 一、瑠璃壺
- 一、緑瑠璃十二曲長坏
- 一、白瑠璃瓶
- 一、瑠璃魚形 六枚
- 一、瑠璃小尺 四枚

- 一、黄金瑠璃鈿背十二稜鏡
- 一、金銀花盤雜玉飾
- 一、子日目利籌飾玉
- 一、瑠璃玉原料

(ロ) 書 跡 調 査

去る昭和三十一年度よりはじめられた書跡調査は本年を以て完了した。本年度において調査した文書類は左のとおりである。調査員は前年同様京都国立博物館長文学博士神田喜一郎、大阪市立大学教授内藤乾吉、文化財保護委員会美術工芸課書跡主任田山信郎、東京国立博物館美術課書跡室長堀江知彦の諸氏である。

- 一、延暦六年六月二十六日曝涼使解
- 一、延暦十二年六月十一日曝涼使解
- 一、弘仁二年九月二十五日勘物使解
- 一、齊衡三年六月二十五日雜財物実録
- 一、雜物出入継文
- 一、出 蔵 帳
- 一、出 入 帳
- 一、王羲之書法返納文書
- 一、雜物出入帳
- 一、御物納目散帳

一、続々修正倉院文書自第十七帙至第四十七帙

一、塵芥文書 三十九卷

一、東南院文書 百十二卷

四、聖語藏古訓点経卷の複製

本年度において古訓点経卷の複製移点を完成したものは左記三卷である。移点は奈良学芸大学教授鈴木一男氏に依頼して行つた。

一、天平十二年第八一号 四分 律卷三十八 一卷

一、神護景雲二年第九八号菩薩善戒経卷一、卷九 二卷

菩薩善戒経の加点年月は不明であるが、西墓点系に属するものといわれ、平安初期のものと推定される。白点は殆ど読下し得る程度に施されていて仮名づけの語彙もかなり豊富である。

五、古文書マイクロ・フィルムの作成

前年より継続中の古文書類マイクロ・フィルムの撮影は本年度においては続々修正倉院古文書第十八帙より第二十一帙に至る計三十巻を了した。

六、正倉院評議会

昭和三十四年度においては先ず六月十八日に第十八回評議会が開催され、曝涼の方法、庫内の特別参観、東京国立博物館における正倉院宝物展、宝物の特別調査、史跡東大寺旧境内の現状変更問題及び第二新宝庫の建築計画等について審議された。ついで同年十二月十六日第十九回評議会を催し、宝物の特別調査、史跡東大寺旧境内の現状変更問題及び第二新宝庫の建築計画等について審議が行われた。